九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

A Dialogue-Based Understanding of Subjective Well-Being: Expanded Application of Day Reconstruction Method and Life World Interview

祁, 秋夢

https://hdl.handle.net/2324/4475202

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（感性学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	祁　秋夢
論　文　名	A Dialogue-Based Understanding of Subjective Well-Being: Expanded Application of Day Reconstruction Method and Life World Interview （対話に基づく主観的幸福感の理解： 拡張された一日再現法及び生活世界インタビューの適用を通して）
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　南　博文 副　査　　九州大学　　教授　　清須美匡洋 副　査　　九州大学　　教授　　加藤 和生

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

主観的幸福感（Subjective Well-Being、以下SWB）は、これまでのGDP（国民総生産）などの経済指標では捉えきれなかった人々の生活の質の高さの指標として、個人が感じる生活満足度や幸福であると考える主観的判断に依拠した実証データを提供する、経済、社会、心理を交差する広範な研究領域を形成してきた。国際比較などが注目される一方で、主観的判断の根拠となる、実体験との結びつきなど、生活実態に即した個人の具体的な状況の中での幸せの捉え方が十分には検討されていないという課題があった。

本論文は、従来のSWB研究で取り上げられなかった環境および文化の文脈の中での生活事象・出来事の重要性を研究の俎上に乗せ、経験主体との対話的なアプローチを通して、幸せの主観的な意味次元を再考する実証的な研究である。具体的な方法論として、Kahnemanら(2004)の一日再現法–前日に起きた出来事に対する主観的評価を求める手法-をベースとし､そこで収集されたエピソードに関する詳細な質的インタビューを実施することで、日常経験の何が、どのように自己にとって「より良い生のかたち」であるかを、本人の語りの内実から明らかにすることを目指している。

第１章において、幸福に関する哲学、経済学、心理学での研究の背景を歴史的に概観し、幸福概念の主要な軸を明らかにした上で、第２章において、Bruner（1986）のナラティブ・モードに基づく人間経験の質的解明という理論的立場を、Vygotskyらの社会文化的な心理理解という大きなパラダイム転換の中に位置づけ、Kvale（1996）の対話論的なインタビューの方法論と関連づけて、本研究の理論的基礎を提示している。実証的な検証として、６名の研究室メンバーを協力者として実施した一日再現法と生活世界インタビューの結果から、（1）主観的幸福感の経験的な根拠は、個人に内在する認知・感情的な成分ではなく、他者との対話を通して理解に至る事後的生成内容であること、（2）その生成に当たっては、個人に固有の意味づけの構成原理が作用し、それはKelly (1955)のパーソナル・コンストラクトの概念によって説明されること、を明らかにしている（第３章）。さらに、著者と類似した背景を持つ５名の中国人留学生を協力者として同様の方法を用いて実施された第二研究において、経験の意味づけが、面接者と被面接者との文化的な共有枠組みによって誘導されるものであり、意味の顕在化は、異なる文化背景を持つ聞き手への説明行為の中で行われる文化的な共通理

解の過程であることを明らかにしている（第４章）。以上の結果を受けて、著者は、主観的幸福感の「主観性」、即ち、その人がその人である様式は、経験してきたことを振り返り、自己を照らし出すことによって顕在化される、異なる他者との対話における「答える行為」という語り（ナラティブ）に現れる意味であるとの結論を得ている。従来の多くの研究では、用意された質問に対する回答という制約があったが、その人の主観性がより十全に反映する本研究の方法によって、その個人性および文化的共有性が明らかにされた。

本研究成果は、これまで解明が不十分であったSWBにおける主観性について、実際に起きる経験を重視するKahnemanら(1999)の研究手法とBruner (1986)によるナラティヴ・モードでの理解という側面を組み合わせることで、対話という協働作業を通じた動的な解釈のあり方と、文化を交差する理解の可能性を提示する新たな貢献を行った点で、ユーザー感性学にとって価値ある業績であると認められる。

最終試験

この論文について、論文調査委員会は、令和２年12月７日（月）15時より、新型コロナウィルス感染防止のためオンライン形式による論文公聴会（出席者、23名）及び口述試験を、祁秋夢氏及び論文調査委員全員の出席の下で実施した。

論文内容について、祁秋夢氏は論文調査委員および出席者からの質問（対話の意義、分析における共同研究者の役割、SWB研究と社会的な実践とのつながり等）に対して的確な応答を行い、質問者及び論文調査委員を満足させる回答を行ったので、論文調査委員会は最終試験を合格と認定した。

以上のことから、論文調査委員会は、祁秋夢氏が博士（感性学）を受理されるのに相応しいと判断した。